

上越市創造行政研究所ニュースレター

# 創造行政

上越市創造行政研究所は、平成12年に設置された上越市役所の組織内シンクタンクです。市政における重要課題の解決や理想像の構築に寄与し、地方自治体としての政策形成能力を高めるため、総合的・中長期的・広域的な視点による調査研究などを行っています。このニュースレターは、それらの活動を一部ご紹介するほか、市の公式見解に限定せず、上越市のまちづくりを考える上で多くの方々と共有したい課題等をお伝えするものです。

Joetsu city Policy Research Unit

No. 43 Mar. 2019

上越市立歴史博物館

P2-3

コラム

上越市の特徴を探る

File 7 日本酒

P4-7

開催報告

第7回信越県境地域づくり交流会

ミュージアムと地域づくり

P8

活動紹介

# 上越市の特徴を探る??

「上越市の特徴は何ですか?」という問いに対して、「目立った特徴はない」あるいは「何でも揃っていることが特徴だ」という声がよく聞かれます。

## File 7 日本酒

日本酒は、室町時代から江戸時代にかけて近畿地方が一大生産地でしたが、明治時代以降は全国的に技術が向上する中で、新潟県は全国有数の酒どころとなりました。ここでは、新潟県の酒どころとしての特徴とその要因についてご紹介するとともに、上越市の位置づけについても見ていきます。

### ▶▶▶ どんな特徴がある?

#### ▲ 酒蔵数

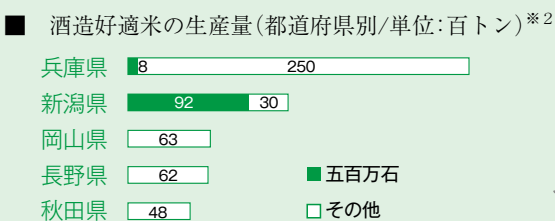
清酒の製造免許場数を都道府県別で見ると、新潟県は全国1位の多さです。



地域別の場数は、国内524の税務署管内別に見ることができますが、上越市を含む高田税務署管内には16場あり、県内2位、全国7位の多さです。

#### ▲ 酒造好適米の生産量

酒造好適米生産量を都道府県別にみると、新潟県は全国2位の多さです。その中で、「山田錦」に次ぐ生産量を誇る「五百万石」に限定すると、新潟県は生産量は、全国1位の多さです。

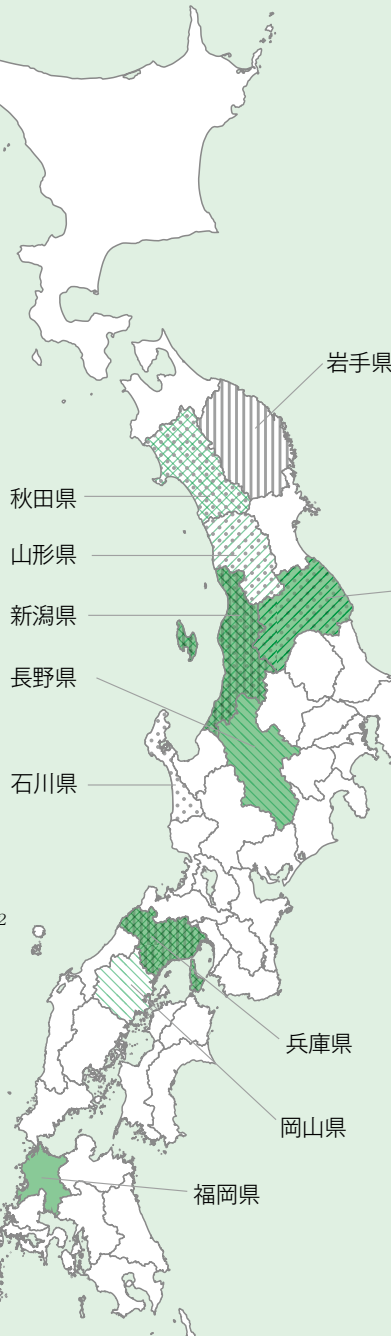


上越市も、この五百万石の生産の一翼を担っています。

#### ▲ 杜氏の技術

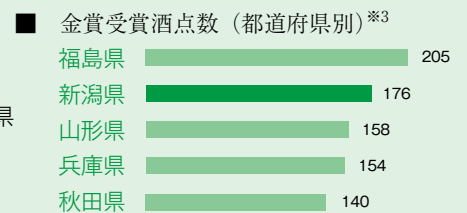
新潟県の越後杜氏は、岩手県の南部杜氏、兵庫県の丹波杜氏と並び、全国でも有能な杜氏集団とされていました。

越後杜氏は、刈羽杜氏、越路杜氏、野積杜氏、頸城杜氏で構成されていますが、上越市はこのうち頸城杜氏の拠点にあたります。



#### ▲ 品質の評価

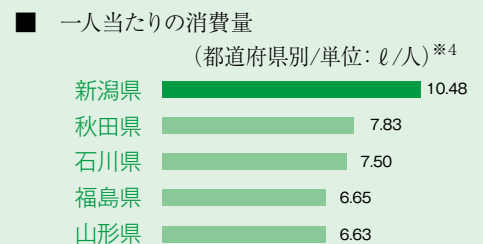
全国新酒鑑評会における最近10年間の金賞受賞酒点数を都道府県別にみると、新潟県は全国2位の多さです。



上越市内で醸造された酒も10点金賞を受賞しています。

#### ▲ 消費量

清酒の一人当たりの消費量を都道府県別にみると、新潟県は全国1位の多さです。



上越市を含む高田税務署管内の消費量は10.61ℓ/人であり、県平均を上回っています。

(出所)

※1 平成27年度国税庁統計を基に当研究所作成  
 ※2 農林水産省「平成29年産米の農産物検査結果(確定値)」を基に当研究所作成  
 ※3 平成20年から29年までの受賞酒数について、フルネット「金賞受賞蔵ガイド2018」を基に当研究所作成。全国新酒鑑評会は、酒類総合研究所と日本酒造組合中央会の共催により明治44年から開催。平成29年は出品点数850点のうち金賞酒点数は232点  
 ※4 平成27年度国税庁統計を基に当研究所作成

果たして本当にそうでしょうか。「ここでは、上越市の特徴と言われるもののうち、ある程度客観的に説明できるものを取り上げ、その程度や因果関係を簡単にご紹介します。「そのくらいは知っている」「その背景は知らなかった」「初耳だ」など、様々なご感想があると思いますが、コーヒブレイクの読んでいただき、まちの特徴を端的に理解する、まちを自慢する、まちづくりを考える、などの場面でお役に立てば幸いです。

## ▶▶▶ なぜ生まれた？

### 雪国の気候

冬の間の気温が極端に低くならないほか、酒蔵が雪で覆われるため、温度が一定に保たれ雑菌も抑制されます。こうした気候は、昔から酒造りに欠かせない微生物の働きに最適な環境でした。

### 豊富な雪解け水

山間地に積もる大量の雪は、雪解け水となり、酒造りに必要な豊富できれいな水を提供します。

### 主要な交通網の発達

昔から主要な街道が通るこの地域には、街道沿いの宿場町に酒蔵がつけられました。また、江戸時代には航路網が発達し、港近くの水運の便利な地域にも酒蔵がつけられました。

### 全県的な取組

昭和 5 年に創立された新潟県醸造試験場は、酒造りの技術指導や酒造好適米の開発などを行ってきました。

また、地酒ブームや食生活の変化などをとらえ、新潟の酒造業界は一体となって淡麗辛口の酒造りに取り組みました。これにより新潟県の清酒生産量が増えていきました。

### 米どころ

江戸時代後期の農村部では、地主層が小作米の余剰分で酒造りをはじめたといわれています。

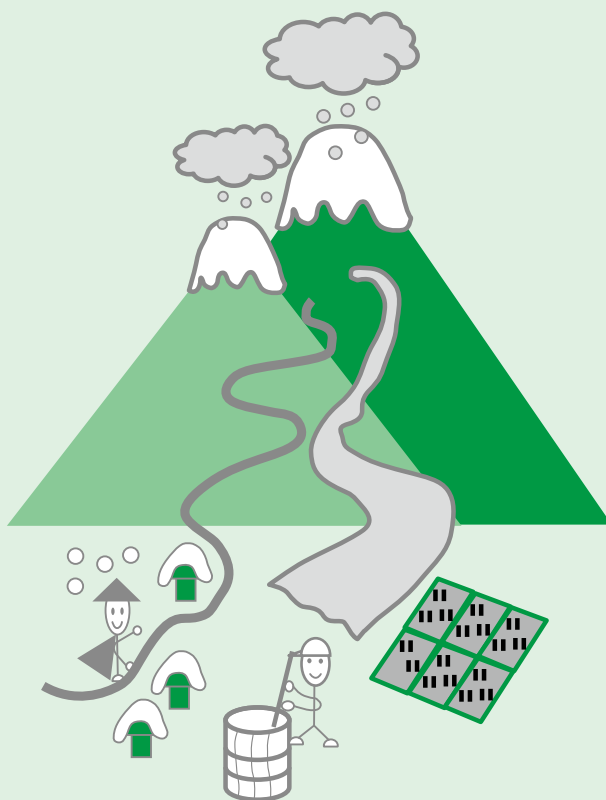
その後、昭和 32 年に誕生した酒造好適米の五百万石の主要な産地ともなっています。

### 出稼ぎが必要な生活形態

豪雪地帯では冬季間の出稼ぎが盛んに行われていました。その中で、日本酒の「寒造り」の普及拡大により、杜氏としての出稼ぎも盛んとなりました。

### 杜氏制度による技術の継承

酒造りの技術は、技能集団である杜氏制度により継承されてきました。その後、酒造りの出稼ぎが減少する中で、新潟清酒学校や県立吉川高校醸造科（現在廃校）などでの技術継承も行われました。



昨今、日本酒は日本文化を象徴するものとして広く世界に発信され、注目されつつあります。しかし、日本酒全体の消費量はかつてに比べると減少しており、消費者の志向も量から質への変化が見られる中、産地間競争は激しさを増しています。全国的に高い評価を得てきた新潟県においても、酒蔵の数や酒造りの後継者が減少し、産業としての維持発展に向けては様々な課題を抱えています。

一方、日本酒の特徴を語るとき、地域の自然環境や食文化、生活様式は切り離せない要素となります。特に、豪雪地帯である上越市においては、雪国の文化や人の気質といった、形では表しづらいものを“表現”する媒体にもなります。また、こうした雪国の風土が付加価値となり日本酒の評価が高まることは、雪国に住む人の誇りにもつながります。

今後の地域づくりにおいては、このような酒文化を守り育み、伝える取組みがこれまで以上に浸透することによって、日本酒造りの人材確保にもつながるような展開が重要と考えます。（太田 栄里）





## 信越県境 地域づくり交流会

まなぶ・つながる・ほじまる

(愛称：はしっこア)

### 開催報告

「はしっこ」だけど、実は「まんなか (コア)」—— 長野県と新潟県の県境、「信越県境」をはさむ国内有数の豪雪地域は、中山間地域や地方都市ならではの共通課題を数多く抱えています。魅力的な地域資源や意欲的な地域づくりの取組みも数多く存在します。

この地域が将来にわたり豊かであり続けるためには、歴史的にもつながりの深かった近隣市町村の人々がお互いに関心を持ち、境界を越えて交流・連携することが大切と考え、平成 27 年度からこの交流会を開催しています。

第 7 回を迎えた今回は、「ミュージアムと地域づくり」をメインテーマとして新潟県上越市で開催しました。

## 開催概要

開催日：平成 30 年 12 月 7 日 (金)・8 日 (土)

会場：市民交流施設高田公園オーレンプラザ (新潟県上越市)

主催：上越市創造行政研究所、信越県境地域づくり交流会実行委員会

共催：一般社団法人雪国観光圏 信越 9 市町村広域観光連携会議 (信越自然郷)

後援：新潟県、地域づくりネットワーク長野県協議会、一般社団法人信州いいやま観光局、公益財団法人八十二文化財団  
信州大学学術研究・産学官連携推進機構、愛知大学三遠南信地域連携研究センター

参加者数：約 100 人

## プログラム

7 日 (金)

### 開会・趣旨説明

14:30  
～ 14:50

主催者である井口委員長と上越市長からの挨拶に続き、本交流会の趣旨説明を行いました。  
なお、会場には多数のミュージアムからのご協力により、各館のパンフレット等を配置することができ、この地域のミュージアムの豊富さを共有する機会となりました。



14:50  
～ 15:50

### 基調講演

#### 「ミュージアムと地域づくり」

講師

笹本 正治 さん

長野県立歴史館長・信州大学名誉教授

まず、博物館は知識・情報の宝庫であるだけでなく、交流の場、自己認識の場、そして過去と現在から未来を考える場所でもある、との説明がありました。また、自分たちの故郷について誇りを持って語れる、「地域の名刺」として使えるようにすることも大事とのこと指摘もありました。

その後、長野県内の事例を中心に、地域づくりの核となっているミュージアムの取組みの紹介がありました。一方、市町村合併等に伴い博物館が減少している状況も踏まえつつ、きちんと足元を見て地域を考えていくことが博物館の役割であり、「地域の未来のために博物館は存在する」、「主人公は住民であり観光客ではない」など、地域の博物館としての原点について考えさせられる貴重なお話をいただきました。



16:00  
～ 18:00

### トークセッション

#### 「ミュージアムを活かした地域づくり」

この地域の多様なミュージアムで活躍されている 4 名の方に登壇いただき、それぞれの館の取組みや地域づくりへの思いを語っていただきました。「ナウマンゾウを地域の宝として地域の皆さんと活動している」、「歴史を語り継ぎ、訪れる人と新しい未来の物語をつくる水族博物館を目指す」、「地域の皆さんに本物の作品に出会う場を提供することが美術館の役割」、「中越大地震で被災した歴史資料を市民と協働で収集・整理してきたことは地域の復興にも大きな意味がある」など、それぞれの館の特徴が感じられる個性的な取組みについて、地域に対する確かな思いとともに語られました。

特別ゲストのワグーラさんからは、ピッツバーグの銃乱射事件後に市内のミュージアムが市民をサポートした事例の紹介があり、「ミュージアムは人の心を癒す場所」、「地域の人をつなぐコミュニティを生み、まちの未来を変えていく役割を持っている」とのお話がありました。

進行役の笹本先生からは、どんな場所にも歴史の痕跡が存在し、そうした学ぶべき対象を見逃してしまわないよう、博物館や図書館にもう一度足を止めて学ぶことが大切であり、学ぶに足る場所であることがミュージアムの意義とのコメントがありました。

セッション全体を通して、この地域の個性豊かで魅力的なミュージアムの存在と地域づくりへの可能性の大きさについて、あらためて気付かせていただく機会となりました。



#### パネリスト

**近藤 洋一さん**（長野県信濃町）  
野尻湖ナウマンゾウ博物館 館長



**高田 紫帆さん**（長野県長野市）  
水野美術館 学芸員



**高橋 由美子さん**（新潟県十日町市）  
十日町情報館 主査



**櫻 健太郎さん**（新潟県上越市）  
上越市立水族博物館うみがたり 館長



#### 特別ゲスト

**キャロリン・ワグーラさん**（京都府京都市）  
国際日本文化研究センター 国際交流基金フェロー



#### 進行役

**笹本 正治さん**



18:30  
～20:00

### 情報交換会

地元食材を利用した料理や地酒を囲みながら、登壇者や参加された皆さんとともに交流を深めました。基調講演やトークセッションの熱をそのままに、明るく和やかな時間となりました。



8日(土)

9:30  
～12:00

### ディスカッション 「ミュージアムを活かした信越県境地域づくり」

4つのグループに分かれて前日の振り返りをした後、「ミュージアムを活かした観光地域づくりを進めたい」、「ミュージアムの力で人々のつながりや元気を生み出したい」、「ミュージアムを地域づくりやビジネスの発想源にしたい」というテーマで話し合い、グループごとに発表を行いました。手軽に実践できそうなものから、ユニークなもの、壮大なものまで様々なアイデアや思いが語られ、大変中身の濃い熱気あふれる時間となりました。



12:30

～16:00

### エクスカーション

今年度リニューアルオープンした上越市立歴史博物館と水族博物館を見学しました。各館長からは、普段なかなかお聞きできない詳細な解説をいただき、前日の基調講演やトークセッションの理解をより深めることができました。



今年度の地域づくり交流会は栄村、飯山市、上越市の3か所で開催しました。それぞれ1泊2日のプログラムとし、一つのテーマに関してじっくり考えていただく機会としました。

来年度の開催については現在関係者間で検討を重ねているところです。詳細が決まり次第、ホームページやフェイスブックなどでご案内する予定です。(大島)

## コラム ミュージアムと地域づくり

第7回信越県境地域づくり交流会のテーマとして「ミュージアムと地域づくり」を取り上げた主催者の立場から、地域づくりにおけるミュージアムの役割と可能性について期待を込めて述べたいと思います。

### 多種多様なミュージアム



#### 博物館（ミュージアム）とは

博物館とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学などに関する資料を収集し、保管、調査研究、展示、教育普及などの活動を一体的に行う機関のことであり、英語ではミュージアム（museum）と表されます。

この中には、博物館という名称の施設のみならず、美術館、動物園、水族館などの施設も含まれており、全国には5,000を越える数\*1が存在しています。

\*1 文部科学省の基準による登録博物館、博物館相当施設、博物館類似施設を合わせた数。



#### 信越県境地域のミュージアム

上越市やその周辺地域にも多種多様な魅力的なミュージアムが存在します。

例えば、「信越県境地域づくり交流会」の主な対象地域である新潟県上越・魚沼地方や長野県北信・長野・だいほく大北地方には、両県の博物館協議会に加盟する施設だけでも約50、小規模なものも含めると100を超える施設があります。






#### 図書館もミュージアムの仲間

地域づくりにおけるミュージアムの可能性を考えると、次のページでご説明するように「図書館」もミュージアムと似た機能を持っています\*2。また、博物館で展示物を見て感銘を受け、図書館の本で詳しく勉強するといった展開など、相互に補完する関係も期待されます。

このことから、ここでは図書館もミュージアムの仲間を含めたいと思います。

\*2 近年、MLA（Museum：博物館、Library：図書館、Archives：文書館）やMAULI（博物館・文書館・大学・図書館・産業界）による連携の重要性が認識されています。

表1 ミュージアムの種類

分野*3	概要（近隣の状況）
<b>自然科学系</b>  野尻湖ナウマンゾウ博物館	<ul style="list-style-type: none"> <li>博物館のほか科学館などの名称あり。</li> <li>上越市など都市部のほか、糸魚川市、十日町市、長野県信濃町など、自然環境の特徴に重きを置く一部市町村に設置されている。</li> </ul>
<b>考古・歴史・民俗系</b>  長野県立歴史館	<ul style="list-style-type: none"> <li>博物館のほか、歴史館、歴史博物館、民俗資料館、宝物館などの名称あり。</li> <li>自治体による運営施設が多く、概ね各市町村に設置されている。</li> </ul>
<b>芸術系</b>  水野美術館	<ul style="list-style-type: none"> <li>美術館、工芸館、文学館、人形館、記念館などの名称あり。</li> <li>民間企業や個人による運営施設が比較的多い。長野市や小布施町などのように複数の施設が集積する地域や、設置のない市町村もある。</li> </ul>
<b>動植物系</b>  上越市立水族博物館	<ul style="list-style-type: none"> <li>動物園、水族館、植物園などの名称あり。</li> <li>他の分野に比べると数は少ない。動物園は長野市や須坂市、水族館は上越市にある。</li> </ul>
このほか、ミュージアムと近い役割を持つものとして・・・	
<b>図書館</b>  十日町情報館	<ul style="list-style-type: none"> <li>原則として図書館という名称がつく（十日町市は情報館という名称）。</li> <li>小規模な町村では図書室のような形態をとる場合もあるが、基本的には各市町村に設置される。</li> </ul>

\*3 写真は、地域づくり交流会の登壇者が所属する館を掲載しました（各館ご提供）。また、分類は筆者によるものであり一つの目安です。








## 地域づくりにおけるミュージアムの可能性

ミュージアムは、歴史や美術、動植物などに対して関心のある人々にとっては、趣味や余暇を楽しむ場としての印象が強いかもしれませんが、また、大都市や外国のミュージアムには観光がてらに訪れることはあっても、地域のミュージアムに足を運ぶ人は多くないように思います。

しかし、今後の地域づくりにおいて、地域のミュージアムは大きな役割を果たす可能性があります。端的に言えば、感性、知識、愛着、にぎわいのほか、自信や絆などを得ることができると考えます（表2）。

表2 ミュージアムから得られるもの  
(地域づくりの視点から)

感性 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域づくりに必要な美的感覚や教養</li> <li>・美しい展示や空間から感じる安らぎ、あるいは刺激によって得られるひらめき</li> </ul>
知識 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・展示内容や展示方法などから得られる地域づくりやビジネスのヒント</li> <li>・自然からの恩恵や災害とのつきあい方など、これからの時代を生き抜く術の手がかり</li> </ul>
愛着 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学びや感動を与えてくれた地域資源によって育まれるシビック・プライド（地域への愛着と誇り）</li> </ul>
にぎわい 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミュージアムが持つ集客力が生み出す、周辺地域のにぎわいや経済活性化の足がかり</li> <li>*発掘サポーター、縄文女子、刀剣女子など独自のファン層もあり</li> </ul>
自信・きずな 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークショップなどにおいて、アートを通じた自己表現から生まれる自信（社会復帰にも貢献）</li> <li>・ミュージアムに集まった人々同士で育まれるつながりや信頼関係</li> </ul>

## ミュージアムはイノベーションの源泉

知識情報化が進展する現代社会において、イノベーション（革新・新機軸）の必要性はしばしば言われますが、それは世界的な最先端の技術開発ばかりではありません。地域の風土や歴史を大切にしながら、地域にある資源同士や新たに取り入れたものを組合せ、新たな価値を生み出す営みもイノベーションであり、多様な知識や感性を持った人々が集い、学びや交流の中から生み出すアイデアも立派なイノベーションといえます。

そのように考えてみると、地域に蓄積された“知”に触れることができ、人々が集うことができ、空間的な魅力を持つミュージアムは、まさしくイノベーションの源泉といえます。考え方や活かし方次第では、道路や電気などと同様に、地域の暮らしや発展を支えるインフラとしてみることもできるでしょう。

また、イノベーションが組合せから生まれるのであれば、一つのミュージアムだけではなく、近隣地域も含めた多種多様なミュージアムを一つのネットワークとして捉える方がより大きな力になると思われます。

ミュージアムの語源は、古代エジプトのアレクサンドリアに図書館と博物館が併設された「ムセイオン」といわれます。また、日本の国立博物館の創設に関わった田中芳男（1838-1916）は、展覧会、博物館、動物園、図書館を「知識の発達を促し、実業に益ある」ものとして一体的に捉えていたとのこと。この原点回帰の考え方は、むしろこれからの時代に必要であると感じます。

ミュージアムを使うのも守るのも人であり、ミュージアムから得られるものは、訪れる人の心持ちによっても、発信者であるミュージアム側の思いによっても大きく変わるでしょう。お互いがこの地域で豊かに暮らす未来を考えながらコミュニケーションをとる地域では、切磋琢磨の関係性が生まれ、地域力が高まるものと考えます。その第一歩として、一人でも多くの方々にお気に入りのミュージアムが見つければ嬉しく思います。

今年度の地域づくり交流会では、ロングトレイル、スローフード、ミュージアムといったテーマ（分野）を取り上げ、地域づくりとの関わりを中心に学びと交流を深めました。これらに共通する点は、この地域ならではの風土がもたらした地域資源であり、その継承と発展に力を注ぐ人々が活動し、その活動を評価する人々が全国に存在することです。一方、そのことは地元で意外と知られていなかったり、私たちとは馴染みの薄い一部愛好家の取組みと見られる向きもあるように思います。

このように各分野で活躍し独自のネットワークを持つ人々と、日々の暮らしの中で地域をつくる人々の距離が近づき、何らかの交流・連携につながれば、相互に発展できる可能性があると考えています。今後の交流会でもこのようなテーマを取り上げていきたいと思っています。（内海 巖）

# 活動紹介

our activity report  
2018.11 ~ 2019.2

当研究所における取組みのうち、最近（2018年11月～2019年2月）の主な活動状況をご紹介します。

※ 7月～10月の活動についてはニュースレターNo.42をご覧ください。



## 政策形成に役立つデータベースの構築

当研究所では、人口や世帯数をはじめとした各種データを整理し、市役所内外からの相談や照会に対応しています。

11月には、上越青年会議所の勉強会において、上越市の人口の動きやその要因についてご説明しつつ、男性に比べて女性が少ない若い世代の状況について意見交換を行いました。



▲ 地域活動フォーラム

12月には、市主催の「地域活動フォーラム」でも人口問題について説明する機会がありました。市内全域からお集まりの320名の方々に、上越市全体の人口の動きに加

え、特に中山間地域の深刻さをデータでお示しつつも、前向きな気持ちを持って将来への持続可能な道筋をつけることの大切さをお伝えしました。

このほか、上越市の人口移動の中でも特に若い世代の動きを把握するため、市内の大学や専門学校にアンケート調査を行いました。

今後も人口データの継続的な整理・更新作業のほか、データベースやデータ集などの形での情報発信も検討しています。また、人口以外にも政策形成に役立つ基礎的なデータの整理を行っています。

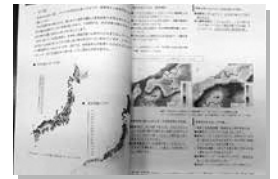
## 信越県境地域における地域資源情報の体系化

今年度は、愛知大学三遠南信地域連携研究センターからの支援を受け、上越教育大学の先生方や新潟・長野両県の学芸員の方々と共同で、信越県境地域（長野県と新潟県の県境をはさむ地域）の特徴的な地域資源情報の整理を行っています。

12月には、愛知大学で開催された「越境地域政策研究フォーラム」に出席し、本研究の意義や途中経過について発表を行いました。この中では新たな課題発見や励みとなる意見をいただいたほか、他地域での越境に関する取組みや研究を行う方々との交流を深めることができ、今後につながる有益な機会となりました。

また、上越教育大学の授業で、地域資源情報を学習素材として活用する方法について学生からのアイデアを求めました。パソコンゲームやボードゲームの題材に用いるなど、楽しくなるほどと思える意見が多く、今後の調査研究の参考にもなりました。

今年度の成果は、報告書として取りまとめる予定であり、現在文献調査や共同研究者との打ち合わせを重ねながら、執筆・確認作業を行っています。



▲ 作成中の報告書

## 信越県境地域づくり交流会の開催

12月に「ミュージアムと地域づくり」をテーマとした第7回の交流会を上越市で開催しました（内容は本紙をご覧ください）。

平成26年度から行ってきた本会の経過については、11月に北海道函館市で開催された「新幹線学研究会」でご紹介する機会や、論文集に寄稿する機会などをいただきました。



▲ 新幹線学研究会

来年度については、基本的に継続する方向で協力団体の皆さんと検討を重ねているところです。

## その他の主な活動

**講演・話題提供** 11月には附属中学校の授業に伺い、公共交通を活かした持続可能なまちづくりについて考えるお手伝いをしました。また、栃木県宇都宮市で開催された「第6回自治体シンクタンク研究交流会」にパネリストとして出席し、シンクタンクの役割などについて話題提供しました。

**国際交流に関する基礎調査** 来年度は国際交流に関する調査研究を実施予定です。これに先立ち、上越市がこれまで行ってきた国際交流の実績を振り返り、改めて国際交流の意義を考えるための庁内勉強会を4回開催しました。また、市内企業における外国人材の活用状況について、ヒアリング調査を開始しました。

## 編集後記

今年度から研究所へ配属になり、年3回の地域づくり交流会や、さまざまな講演活動など、目まぐるしく過ぎた1年間でした。

今回のニュースレターは平成最後の発行となる見込みです。新たな元号のもとでも、引き続きまちづくりに役立つ情報を発信できるよう、調査研究を進めていきたいと思えます。（伊倉）

## 上越市創造行政研究所ニュースレター 「創造行政」 No.43 Mar. 2019

発行：上越市創造行政研究所  
〒943-0804 新潟県上越市新光町1-8-11 上越保健センター  
TEL:025-526-3490 FAX:025-526-6184  
E-mail:souzou@city.joetsu.lg.jp  
<https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/souzou-gyosei/>

ニュースレターは木田庁舎1階市政情報コーナー、各総合事務所でも閲覧可能です。また当研究所のホームページにも掲載しています。